第 2 回 SPARC Japan セミナー2013

「人社系オープンアクセスの現在」

「学術情報」と「体系的な知」のはざまで ―大学出版の模索―

鈴木 哲也
（京都大学学術出版会）

講演要旨

「本当に人文系のオープンアクセス化が遅れているのか？（理系が進んでいるのか？）」という疑問は別として、人文・社会系の研究者の中に、オープンアクセス化への不安や反発が少なくないのも事実である。そこには、学術成果を「学術情報」とは区別した comprehensive なものとして捉える作法がある。この作法を無視しては、オープンアクセス化はもちろん、学術情報を電子化して利用すること自体、進まないだろう。「情報は情報として」活用しながら総合性・体系性を構築すること、そのための方法論が、今日の学術コミュニケー ションに必要とされている。 学術情報リポジトリへの図書の掲載、若手人文系研究者の成果公開プログラムの推進、「iPad アプリ本」の試作など、（微々たるものではあるが）試行錯誤してきた京大学術出版会の経験から、人文系のオープンアクセス化の促進と、その向こう側にある新しい学術コミュニケーションの構築を考えてみたい。

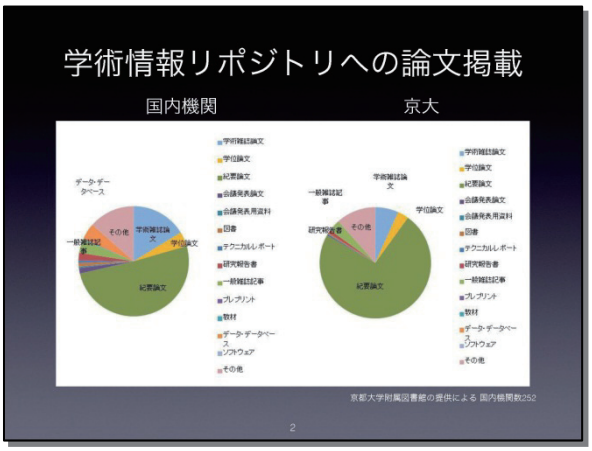
鈴木 哲也

京都大学文学部および教育学部に学び、ライター・編集者として活動の後、1996年より京都大学学術出版会編集次長、2006年より現職。編集者としての主な担当領域は地域研究、人類学および自然科学一般。大学出版部協会常任理事、日本書籍出版協会評議員。

「人文系の電子化が進まない」？

私どもは京都大学の図書館と共同でいろいろなプロジェクトを進めています。たまたま、このセミナーのことを図書館の方にお話ししましたところ、「人文系のオープンアクセスが遅れている、というのは本当なのですかねえ」とおっしゃって、この資料をくださいました（図 1）。これはリポジトリに掲載されたアーティクルの数を示すグラフです。

右側が京都大学のリポジトリにおける全体の構成比で、緑が人文系の紀要論文、青が自然科学系ですが、



（図 1）

東京大学も同様の傾向のようです。全国で 262 ある大学のリポジトリを見ると、少し構成比は変わるのですが、同じように人文系が多く、自然科学系が少ないです。しかも自然科学系の中には、地方医学雑誌のようなものも含まれているということですから、数だけで言えば、必ずしも人文系が遅れているわけではない。むしろ今日は、人文系というよりも、学問全体として何が問題なのかということを考えてみたいと思います。

私どもは 5 年ほど前から、それほど商売に影響のない範囲、そして実験的に意味があるものとして、年間 2 冊、実際に刊行された本を選んでリポジトリに無償掲載しています。以来、その是非をめぐって、とりわけ人文社会系の先生方とディスカッションをする機会があるのですが、大体否定的な意見が多いです。

その理由は、大きく三つに整理されると思います。まず、人文社会系で最も早くインターネットやデータベースの技術を使って資料を集積しようとしたのは国文学領域ですが、書籍のオープンアクセスに一番反対されたのが、その国文学の先生方でした。確かに検索も抽出も容易になったけれど、一方で、院生の論文の質が悪くなったと言うのです。これはどの学問でもそうだと思いますが、一つの資料、一つの作品だけ見ても、ほとんど何も論じることはできません。例えば中世文学だったら中世全体、できれば前後の時代を俯瞰した上で、その作品を凝視する。そういう意味では私が畏敬する濱田啓介先生がしばしばおっしゃる「通観と凝視」という言葉に象徴されるように、対象とする資料あるいは課題の周辺までしっかり俯瞰した上で自分の仕事をすることが必要です。しかし、実際に資料が簡単に手に入るようになると、その資料だけを見るようになり、それによって書かれる論文の質が非常に低下するということがあったようです。この問題は、国文学、歴史学に限らず、他の分野でも言えると思います。

それに関連してもう一つ、先生方が大きな懸念を持っているのが、ネットカルチャーとアカデミックカルチャーの違いという問題です。ネットカルチャーでは、インターネットに上がったものはあまり批判されず、容易に絶対化されます。逆に、これまで絶対的だったものがインターネット上で批判され、容易に相対化されるということがあると思います。言うまでもなく、学問は批判と再批判で成り立つものですが、アカデミズムの世界で確立されてきたきちんとした方法論がないまま、容易に絶対化され、相対化されるのが、ネット世界の傾向です。ところが、歴史でも文学でも、紀要に載せる個別論文は、その個別論文だけに意味があるのではなく、例えば 10 年かけて自分が取り組もうとしている、日本中世とは何か、日本中世の社会構造とは何かというような、グランドセオリー的な問題関心の中の一部として、〇〇寺にある△△文書群を研究していると思うのです。だからその〇〇寺にある△△文書群だけをクローズアップしても、全体の研究構想が分からなければ、その論文の意味や正しさは理解できません。にもかかわらず、そこだけ取り出されて、しかも、歴史学なら歴史学、文学なら文学のしっかりしたトレーニングを受けていない人たちにさらされることの危険性が強くあるのではないかということです。

三つ目については、2008 年の「Science」に載った論文で、計量社会学的な方法を使って、オンライン化した後と前のサイテーションの範囲について調べたものがあります（図 2）。例えば物理のあるイシューに関して書かれたものが、どういう問題関心の範囲で引用されているかを見てみると、実はオンライン化されて以降、極めて同業者的に、同じ問題関心、同じ研究対

（図 2）

象のある人間の間、簡単に言えば同じジャーナルの間でしか引用されていないということを、かなり緻密な計量的方法で明らかにした非常に面白い論文です。一言で言えば、学術コミュニケーションが非常に狭域化してしまったということです。今日、学問の細分化が問題にされるわけですが、学術研究を、総合化からはますます遠い、個別に切り離されたものにしてしまっているのではないかということが懸念されます。

オープンアクセスと学術書のリストラクチャー

以上の 3 点は、出版がオープンアクセスにどう関わっていくか、あるいはオープンアクセスを皆さんがどう進めていくかという点にラディカル（根本的）に関わる問題だと思います。ところが、私ども学術出版業界は、学術コミュニケーションがどう変化し、その中で研究者がどう悩んでいるかをあまり自覚せずに、この 20 年ぐらい、増大する成果公開のデポジットの受け入れ先として、一様に扱ってしまった。一言で言えば、なんでもかんでも本にすればよいということで、研究書の数そのものが急増し、その結果、ビジネスとしての出版が非常に劣化しました。単純に言えば本が売れないということですが、正直、ほとんど参照するに足りないような本も少なからずある、というのが本当のところではないでしょうか。

もう一つ、劣化したビジネスということに関わって、Martin さんのご報告の中でも話題になった APC の話があります。日本の場合、人文社会系では研究者個人ではあまり Processing Charge は払わないのですが、最近は大学や学部等が、出版助成という形で年間 150 万円とか 300 万円というお金を用意し始めました。このこと自体は大変有意義なことで、京都大学の場合、若手研究者の成果公開促進に相当額の予算を付けていただいていて、すでに大変な効果も挙げています。こうした出版助成制度は、いわば個人の APC の代わりになっていると言って良いと思いますが、実はそれを狙った商売があります。「150 万出してくれれば先生の博論を出版してあげますよ」という商売ですね。科研費の成果公開促進費（学術図書）が機関経理になって以降は、「科研費出版見積もりします」などと公然と広告するビジネスさえ現れています。いわば予算を食い物にするビジネスモデルができてきたと思います。

従って私は、成果公開に関わる者は、このような問題をもう少し原理的に考えて、きちんと咀嚼しなければいけないと思っています。一つは、まず即物的に仕分けをする、つまり、これは本にすべき、これは本にすべきではないということを厳密に考えるということです。また、本にしようと思ったときは、そのための手法をきちんと確立しなければなりません。

オープンアクセスの向こうへ

やや大上段に構えて言えば、本というものは、研究センスを磨くものにすべきである、つまり体系的、総合的、comprehensive な知をしっかりと身に付けさせるためのものであるべきだと思います。個別論文はそういうことは果たせません。研究成果を本にするということは、その研究そのものの普及・宣言であると同時に、ある規模の広がりをきちんと理解させることで、厚みのある研究者を育てるような中身にしなければいけないと思うのです。そうすることで、研究のインパクトも確実に上がります。

同時に、マイナーと思われる分野にも、実は非常に強い読者がいることも忘れてはいけません。私どもは『西洋古典叢書』というシリーズを出版しており、ちょうどこの前、100 巻目を出しました（図 3）。これは、

（図 3）

この業界では誰も成功するとは思っておらず、今でも「あれは大変でしょう」「いつまで続けるのですか」と言われるのですが、実は『西洋古典叢書』は私どもの一番のもうけ口です。1 巻当たり平均で 2000～3000 部、多いものは 5000 部ぐらい売れていますが、その成果の上に立って、2010 年に『西洋古典学事典』という非常に大きな事典をつくったのです。2 万 9400 円の本ですが、それも今、2200 部ぐらい売れています。これも業界の仲間内には、「うちでやったら半分の部数で倍の定価だ」と言われました。つまり、読書人というのは非常に恐ろしく、極めてマイナーだと言われている分野にも、実はハイアマチュアの関心が大変高い分野があるのです。文学などもそうですね。先ほど Martin さんがトマス・ピンチョンの専門家だという話がありました。私はトマス・ピンチョンが大好きなのです。正直、日本人でピンチョンを読まれた方は少ないと思います。でも好きな人は好きで、ピンチョンの本なら絶対に買うという人はいるわけです。そういうマイナーな分野でも熱心な読者がある程度以上はいることを忘れてはいけません。

では、どうするのか。一つは、先ほど仕分けと申しましたが、本なら本、雑誌なら雑誌、オープンアクセスにするものならオープンアクセス、それぞれにどういう性格であればいいのかということを考える必要があります。必ずしも対立項というわけではないのですが、速報性と領域性、非速報性と汎領域性、国際性と国内性といったことが仕分けの際の要件になるでしょう。それから、いわゆるパラダイム指向的な研究の広さを示すものなのか、それとも資料なら資料、個別の知見なら知見を細かく分析するものなのかという、研究成果の個々の性格から、それに適合的なメディアや技術を効果的に利用していく必要があると思います。

日本にもエディタースクールという類のものがあり、原稿整理の仕方、校正の仕方は教えるのですが、どうすれば学術書を編めるかは誰も教えてくれませんし、そういう本もありません。ただ、慶應義塾大学出版会から、コロンビア大学出版部の編集長を務めた William Germano（現在は Routledge の副社長だそうですが）が書いた『From Dissertation to Book』という本の翻訳が出ていて、これは結構面白いです。外国には、学術書の編集技法がちゃんとあり、例えば interchapter integration や structural editing などという言葉が、海外の学術書編集者と話をするとしばしば出てきます。残念ながら日本にはそのような言葉はありませんが、そういう既存の手法も含めて、本、インターネットメディア、ジャーナル、それぞれに応じた編集技法が必要ではないかと思います。

各種アーカイブとの新しい協働

今、具体的に幾つかのことを考えています。まず伝統的な意味での本について言えば、私どもは年間 70 冊ぐらい本を出版するのですが、その数でいいのかという問題があります。もう少し減らしても、パラダイム指向的な、個別研究を越えて重要なもの、新しい知見に迫っていくためには学説全体を見渡して批判するような本を中心に出していきたいということです。あるいは、これは欧米によくあるのですが、例えば Begon 他の『Ecology』や、物理で言えば『Gravitation』、昔だったらサミュエルソンの『経済学』みたいなもののように、分野ごとに comprehensive な大型本。そういうものを出版していこうと思っています（実際に、上記『Ecology』は翻訳出版して大きな売上がありました）。

次にオープンアクセスとの接合という点で言えば、本とオープンアクセスされたデジタルデータをつなげてもいいのではないかと考えています。例えば、つい最近出版した『グリッド都市』という歴史都市研究の本があります。本としても非常に厚いのですが、図版がたくさんあります。多くはスペインの植民都市についての古い文献に基づいた図版なのですが、最近の調査のカラー画像や、Google map で上から見たイメージなどは、なかなか本には載せられないのです。そこで、本の図版に添えられた QR コードにスマートフォンをつなげると、京大の地域研究統合情報センターの

データベースに接続し、そこに集積された視覚資料の中から関連するものを見ることができるようにしました。このように、紙の本とオープン化されたデジタルデータをつなげて参照していくということも今後大いに進めていこうと考えています。

もっと電子的なものとしては、京都大学理学研究科の研究内容を高校生に向けて紹介しようとする iPad アプリ「わくわく理学」があります（図 4）。これは、ページにすれば 140 ページほどのものです。30 秒ほどの動画を 30 数点（最初の動画のみ 1 分）組み込み、また高校生には難しい専門用語については、その語をクリックすればグロッサリーが出るようになっています。高校生向けだからこそ、こういう電子的なメディアで参照しやすいようなものをつくっています。

もちろん他の出版社と同様に既存のコンテンツを PDF 化してデジタルデータとして再販売していくことなども考えているのですが、なかなかビジネスモデルが見つかりません。むしろこの時代、オープンアクセスを視野に置きながら、そこで足りない、満たされないものを本の側で埋めていくということをしたいと思っています。逆に言えば、本でできないことをオープンアクセスの側に移していく、あるいはオープンアクセスを利用しながら、研究・教育の上で利用しやすい本をつくっていく、そうしたメディアの適合性に鑑みて仕事をしていくことが必要です。

例えば史料については、石居先生のおっしゃるように、そのまま出してしまっていいのかというものもあります。また美術資料などは画像にしてもなかなか細部が分からず、実際に触って、ものを見てみないと、本当にそこで作家が、あるいはその時代の人が何を行ったかが分からないことがたくさんあります。一方で、美術資料の中には、非常にアクセスしにくいものがある。例えば個人が古物商等から買って所蔵した瞬間に、どこにあるかさえ分からなくなってしまうことが少なからずあるのです。そういうものをデータベース化して、今どこにあるかがメタデータとしては明らかになっている状態にしておき（その場合、可能ならば影印もオープンアクセスして良いと思います）、必要な場合は研究者が現物を触るというような、研究上の利便を図る工夫もできるでしょう。

このように、オープンにするデータそのものも、何が一番適合的なのかを考えてもいいのではないかと思います。

（図 4）